



インフル対策協力し合おう

大学教職員の皆さん

染谷忠彦
女子栄養大学常任理事

新型インフルエンザ大流行の兆しが見えた前期、どの大学もかなり神経をとがらせ、マスクに消毒液、備蓄の準備に追われました。当時は学生一人でも感染者が出たら、全学休校措置をとらざるをえない状況でした。夏に向かい、感染はトーンダウンしたかに見えたが、流行は少しも沈静化していなかったようです。

小・中・高校に比べて報道される機会が少ないため、ご存じない方も多いと思います。7月に入り、大手を含めて何大学かは、1週間の全学休校措置をとりました。これらの大学の感染源は、通学途中もあるでしょうが、サークル活動、コンパ、アルバイトが中心と見られています。

合宿でのバス移動、大部屋での宿泊など、密集した状態では感染が広がりやすいですし、コンパ等で回し飲みなどしたら、ひとたまりもありません。教職員も学生も、意外と自分ばかりかからないと思っているものですが、今振り返れば、水際対策を怠っていたのではないのでしょうか。

本学は、他大学の感染状況を見て、8月から「うつらな い・うつさない・もちこまな い」をスローガンに掲げ、①うがい・手洗い②マスクの着用③毎朝の体温測定を励行しています。学科によっては、

研究室に毎朝体温を報告させているところもあります。

入学試験では、入校時に手の消毒、マスク着用を義務づけることを決めました。試験当日、インフルエンザに感染している受験生に対しては、A

O・推薦入試の場合には予備日を設けます。一般入試の場合、別日程での受験が可能ならば、検定料等を回して受験の機会を確保します。

後期に入り、サークル活動が活発化していますが、これ

が感染源の一つになっていることは先に述べた通りです。近年、大手大学のサークルに他大学の学生が入部するケースが非常に多くなりました。大手大学はこの現実を視野に入れ、予防対策をしていたにもかかわらず、

先般、インフルエンザ対策の情報交換会を十数大学と行いましたが、予防対策にかなりの温度差があることがわかりました。一部の大学だけでは、限界があります。すべての大学が協力しながら、早期のインフルエンザ対策を徹底していこうではありませんか。

